も、草も、猫も、道路も、ビルも、電車も、牛までが雨の色に染まってしまって、ものの形や輪郭がとけて、水のなかに流れだしてしまいそうな気配だった。

春先の、海からの荒い風に、乾いた無数の砂粒が舞いあがって、大気を砂色に染める季節が、風の息が切れるかのように不意にやむと、青空を覗く間もなく、早い雨が来た。

雨が合図だった。

もちろん、4月29日、朝、8時きっかりに降りはじめた雨を、奇妙だと思う人は誰もいなかった。少なくとも、その時点では、単なるきまぐれな春の雨だったはずだ。気候が変わりやすいのは、いつものことだ。気にするほどのことではない。次の日も雨が降った。1日、2日、3日と雨が続き、5月5日の子供の日も、終日、絹糸の白い雨が降り、全国で、祭や行事や催しものが雨のなかで行われ、ゴールデン・ウィークのすべてが雨で終ったあたりから、誰彼となく、今日もまた雨、いやですねという紋切型の挨拶に微妙な変化が生じて、10日、15日、20日と雨が降り続いた頃には、今年の天気はどうなってるの？　梅雨がひと月も早くなるなんて、今までなかったわよねぇ、単なる偶然かしら？　と長雨に対して、不満が愚痴に、苛立ちが不安へ、呟きが叫び声へと、さまざまな声が飛び交い、声の調子が高くなって、気象庁やテレビや新聞社の電話は鳴りっぱなしになった。女たち、とくに、主婦たちの声は悲鳴に近くなって、誰のせいでもないのに、洗濯物がかわかないという簡単な理由からはじまった不満は、天気予報がはずれるたびに、気象庁やテレビ

局への抗議の声に変わった。長期の天気予報は、修正につぐ修正を余儀なくされ、テレビの天気予報のおじさんやおねえさんたちは、弁解と弁明で曇りっぱなしの顔をしていた。

ビッグ・バンの風に吹かれて、150億年もおとめ座の銀河団の方角へと疾走しているわが地球ではあるが、本当は、どこへともなく宇宙を漂流していると言った方が正しいくらいに、偶然に偶然を重ねるように流れているのだから、少々の気候の変化は当然のことだった。地球がどこから来てどこへ行くのか誰もたいした関心をしめさないのに、早く長雨が終って、青空と太陽を見たいという欲望は、まるで永遠の謎でも解くがごとく熱気を孕んでいた。誰もが、1日でも早く雨が止むことを願い、雨さえ止めば、また、昨日、昨年、昔と同じような生活がもどってくると確信しているふうだった。

人々の間には、地表での1日が永遠であるかのような感覚がひろがり、暗く、重い、灰色の雲のベールから垂直に降り続く雨は、無数の惑星や恒星や星雲や銀河を隠すには充分なものになっていた。1本の指でさえ、太陽の姿を消してしまえるのだから、莫大な質量の雨雲が宇宙のすべてを隠してしまったとしても不思議ではないという訳だ。

X氏は、おびただしい呟きや嘆きや叫び声にはうんざりしたが、雨は決して嫌いではなかった。いや、かえって、すべての事物に透明な水の膜がかかっている光景は、自分の心を妙に落着かせる作用があると感じていた。遠い、遠い昔、魚だった頃の感覚を思いだしていた。空気までが水をた